

令和7年度

授業改善グランドデザイン

「学びの変革推進プラン」
施策1の推進に向けて

全国学力・学習状況調査の結果分析と学力向上の方略

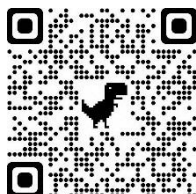
1	全国学力・学習状況調査の結果の概要	P1～2
2	授業改善3つのポイント・チェックリスト	P3～4
3	各教科の結果概要	P5～10
4	学力調査と質問調査の分析	P11～12
5	授業改善のための情報リンク	P13



令和7年8月
福島県教育庁義務教育課



©すべてのデータを、福島県教育庁義務教育課WEBサイトからPDFでダウンロードいただけます。



<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/70056a>

または

福島県教育庁義務教育課

検索

1 全国学力・学習状況調査の結果の概要

調査に関する概要

実施日	令和7年4月17日（木） ※中学校理科は令和7年4月14日（月）～17日（木）	
実施校数	小学校 379校	中学校 210校
調査学年	小学校 6年生	中学校 3年生
調査教科	小学校 国語、算数、理科	中学校 国語、数学、理科

※ 実施校数は、4月17日に調査を実施した数である。

※ 義務教育学校（前期課程・後期課程）及び特別支援学校（小学部、中学部）を含む。

校種・教科に関する調査結果の概要

校 種	教 科	対象児童生徒数	福島県平均正答率 (中学校理科はIRTスコア)	全国平均正答率 (中学校理科はIRTスコア)	福島県平均正答数	全国平均正答数
小学校	国 語	13,457	65	66.8	9.1/14	9.4/14
	算 数	13,451	55	58.0	8.8/16	9.3/16
	理 科	13,452	56	57.1	9.5/17	9.7/17
中学校	国 語	12,696	53	54.3	7.5/14	7.6/14
	数 学	12,695	45	48.3	6.8/15	7.2/15
	理 科	12,643	49.6	50.3	2.8/6	2.9/6

※ 児童生徒数は、4月17日に調査を実施した数である。

※ 国の公表方針及び提供資料に基づき、県の数値については整数値による公表である。

※ 中学校理科のみIRTスコアによる公表である。

IRTテスト（項目反応理論テスト）とは

IRT（Item Response Theory：項目反応理論）は、個々の問題の難易度と、それに対する児童生徒の解答状況から、各児童生徒の学力（能力）をより正確に推定し、同時に各問題の難易度も統計的に測定するための理論と方法です。従来のテスト（IRTではないテスト）は、全員が同じ問題を解くことで学力を測ります。点数が高ければ学力が高い、低ければ学力が低い、と単純に判断します。一方で、IRTテストは、学習指導要領の各領域からより幅広く出題できるよう複数の問題セットを用意し、児童生徒ごとに異なる問題セットを割り当てて学力を分析します。ある問題に正しく答えたか、間違えて答えたかだけでなく、その問題がどれくらい難しい問題だったかという情報も加味して、受験者一人一人の学力を推定します。これにより、同じ合計点数であっても、解いた問題の難易度構成によって、より詳細かつ正確に個々の学力を把握することができ

IRTテストを活用する意義

全国学力・学習状況調査において、IRTテストを活用することは、以下の点で意義があるとされています。

1. 今まで以上に多くの問題を使用することで、幅広い領域・内容等での調査が可能になる。
2. 調査日の複数設定が可能になり、各児童生徒が異なる問題を解く設計にできる。
3. 問題を一部非公開とし、次年度以降も出題する設計とすることで、年度をまたいで児童生徒の学力を比較することができる。

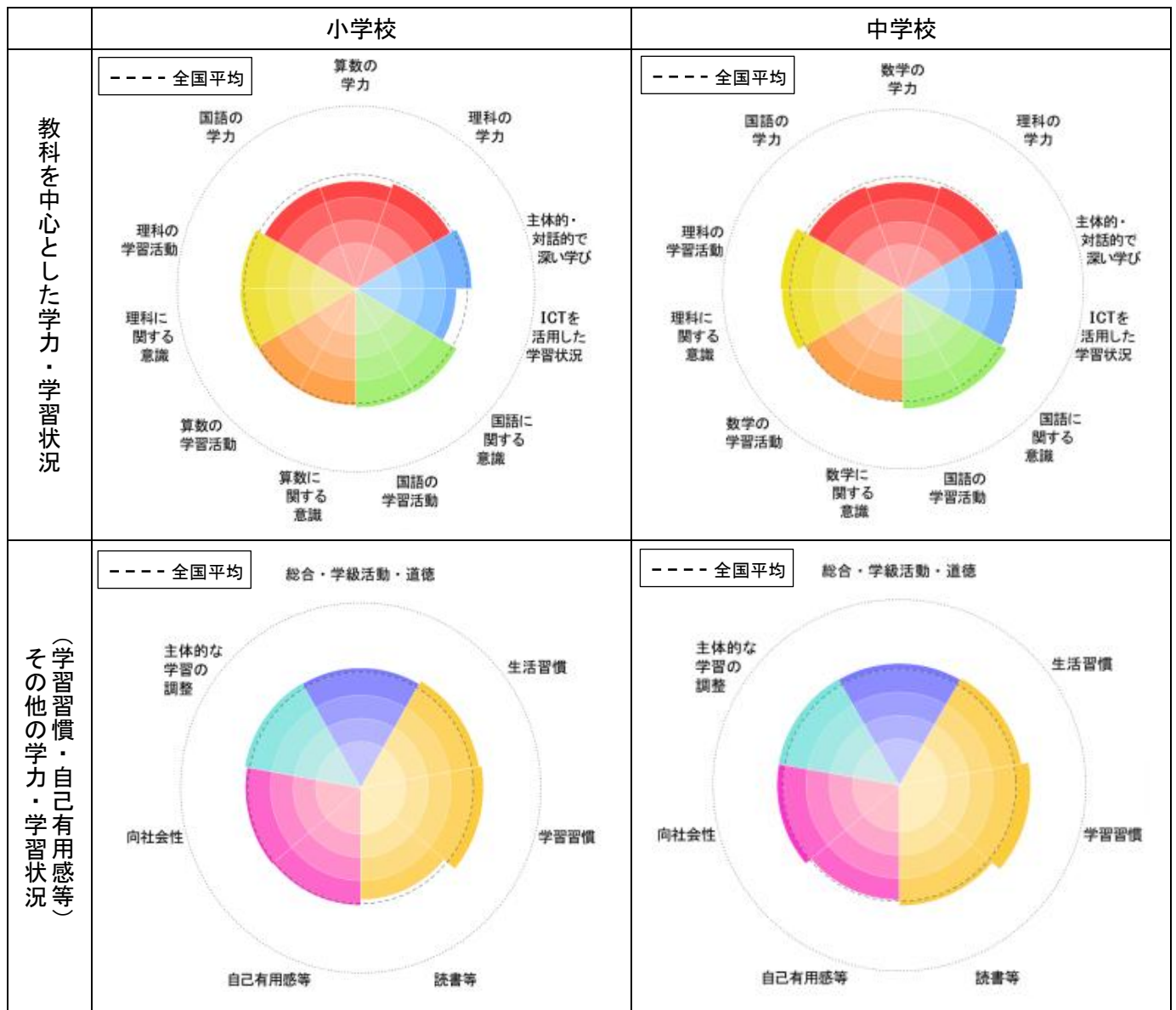
IRTスコア

IRTスコアは、IRTに基づいて算出される受験者の学力を表す点数です。従来のテストの点数と大きく違う点は、問題の難易度が考慮されることです。難易度の高い問題に正答していると高めに、難易度の低い問題に誤答していると低めに算出されます。同じ正答数でも、解いた問題の難易度によってスコアが変わるため、異なるテストや異なる受験者集団の間でも、より公平に能力を比較できるようになります。全国学力・学習状況調査のIRTスコアは、500を標準とした得点で表されます。

IRTバンド

IRTバンドは、IRTスコアを分かりやすく段階に区切ったものです。IRTスコアという連続的な値を、例えば1から5までの5段階などに区分します。通常、IRTバンドは3を基準のバンドとし、5が最も高いバンドとなります。各バンドは、そのバンドに属する受験者がどの程度の難易度の問題に、どのくらいの確率で正答できるかを示す学力レベルの目安として使われます。

令和7年度の全国学力・学習状況調査では、児童生徒一人一人の学力・学習状況をこれまで以上に細やかに分析し、その特徴を把握しやすくするため、結果チャートの領域構成と利用する質問項目が見直されました。この見直しのねらいは、各学校が自らの児童生徒の学力や学習状況を多角的に分析することで、次なる学力向上に向けた取り組みや授業改善、さらには学校運営の改善といった計画や具体的な方策を立案・実行できるよう支援し、子どもたちの学びをより一層深めることにあります。



学力・学習状況の領域名と質問番号の対応一覧

〈教科を中心とした学力・学習状況〉

領域番号	領域名	児童・生徒質問番号
1	国語の学力	
2	算数・数学の学力	
3	理科の学力	
4	主体的・対話的で深い学び	(31)～(35) (37) (39)
5	ICTを活用した学習状況	(28) (29)
6	国語に関する意識	(44) (45) (47)
7	国語の学習活動	(46) (48)～(51)
8	算数・数学に関する意識	(52) (53) (55) (56)
9	算数・数学の学習活動	(54) (57)～(59)
10	(小) 理科に関する意識	(60) (61) (63)～(65)
10	(中) 理科に関する意識	(60) (61) (63)～(66)
11	(小) 理科の学習活動	(62) (66)～(70)
11	(中) 理科の学習活動	(62) (67)～(70)

〈その他の学力・学習状況（学習状況、自己有用感等）〉

領域番号	領域名	児童・生徒質問番号
12	総合・学級活動・道徳	(40)～(43)
13	生活習慣	(1)～(3)
14	学習習慣	(17) (19)
15	読書等	(21)～(24)
16	自己有用感等	(5) (6) (10) (12) (14) (15)
17	向社会的性	(8) (9) (11) (27)
18	主体的な学習の調整	(16) (36)

※ 領域番号1～2（小学校は3を含む）については、各教科の全国平均正答率を、領域番号3については全国平均IRTスコアを基準として比較したものです。

※ 領域番号4～11については、「小学校児童・中学校生徒質問対応領域・項目番号」に表示した質問における「選択肢別の得点換算」の全国平均値を基準として比較したものです。

※ 領域番号12～18については、「小学校児童・中学校生徒質問対応領域・項目番号」に表示した質問における「選択肢別の得点換算」の全国平均値を基準として比較したものです。



「**感**じて**動**き出す」学びへ



1 学び出す

「確かめたい」「考えたい」「やってみたい」

すべての子どもが課題解決の見通しをもったり、解決方法を選択したりして、自ら動き出そうとする授業にします。

2 学び合う

「話したい」「聞きたい」「話し合いたい」

すべての子どもが友だちの話に耳を傾け、自分の考えを確かにしたり、新たにしたり、磨き上げたりする授業にします。

3 学びとる

「分かった」「できた」「がんばった」

すべての子どもが今日の授業で「自分は何がわかり、何ができるようになったのか」を実感できる授業にします。

教師が「**話す**」授業から、
教師が「**みる**」「**きく**」「**つなぐ**」授業へ

～ 授業改善チェックリスト ～

＜すべての子どもが「学び出す」授業 にするために＞

- ☐ すべての子どもに結果の見通しをもたせたり、解決の見通しをもたせたりしている。
- ☐ すべての子どもの多様な見方や考え方を引き出すことができる学習課題を設定している。
- ☐ 教材との出合わせ方を工夫し、「考えたい」「やってみたい」という思いを引き出すようにしている。

＜すべての子どもが「学び合う」授業 にするために＞

- ☐ 友だちの考えを聞きたい、自分の考えを話したいと思う発問を設定している。
- ☐ すべての子どもが、互いの考えを比較、検討、吟味することができる時間を確保している。
- ☐ 子どもと子どもの発言をつないで、集団で学び合える授業づくりをしている。
- ☐ 分からないことを「分からない」と言える安全・安心に学べる学級になっている。
- ☐ 教師が話しすぎることなく、子どもが話す機会を多く確保している。

＜すべての子どもが「学びとる」授業 にするために＞

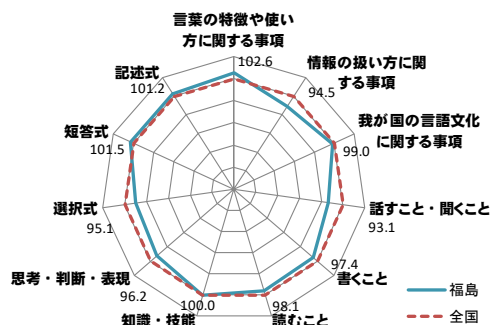
- ☐ 授業で何がわかり、どのようなことができるようになったのか、自分の言葉で学んだことを振り返らせている。
- ☐ 学んだことを活用したり、次の学びにつなげようと考えたりする場面を位置付けている。
- ☐ 個に応じた振り返りの視点を与え、自分の成長や変容に気付くことができるようにしている。

- ☐ 子どもの学びから自分の指導を振り返っている。

3 各教科の結果概要

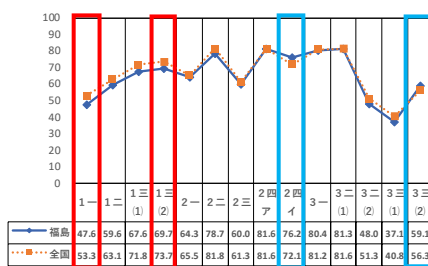
小学校国語の結果概要

領域・観点・問題形式別の状況



※ レーダーチャートでは、全国平均正答率を100とした場合の本県平均正答率の割合を示している。

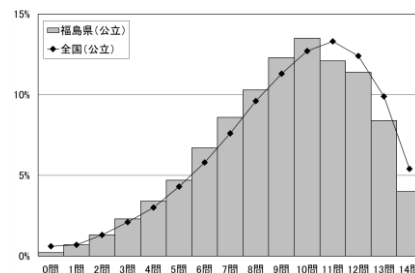
設問ごとの平均正答率



正答率が比較的高い設問（青枠）と低い設問（赤枠）

- 2-4イ「学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができる」
- 3-3(2)「目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができる」
- 1-1「目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができる」
- 1-3(2)「話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができる」

正答数の分布



福島県全体で取り組みたい課題と指導の重点

① 課題の見られた設問

国語 1 バスの運転士にインタビューする
〔設問三(2)〕「話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができる」

② 誤答分析から

右にある小森さんのイの発言を「新たに聞きたいことが見つかった（選択肢2）」と誤って回答した児童は 17.8%でした。
（正答は、選択肢3：69.7%）小森さんのイの発言は、運転士の「運転士以外にも安全を守っている人がいる」という内容の発言を受けたものです。それを「新たに聞きたいこと」があると捉えたための誤答と考えられます。

③ 指導の重点

聞くことの指導においては、話し手の考えと自分の考えとを比較して共通点や相違点を整理したり、共感した内容や納得した事例を取り上げたりして、自分の考えをまとめることが重要です。

自分が聞こうとする意図を明確にした上でインタビューを実施するとともに、インタビューの場面では相手から引き出した話し手の考えと自分の考えを照らし合わせて、共通点や相違点を整理し、自分の考えをまとめる過程を充実させるようにしましょう。さらに、このような活動をおして自分の考えと比較する経験を積み重ねることも大切です。

インタビューの場面に限らず、「聞くこと」や「話し合うこと」の学習場面では、自分の考えと比較する意識をもたせるよう働きかけましょう。

- 1 相手の答えは自分の予想どおりであることが分かったから。
- 2 自分が聞こうとしていた内容のほかに、新たに聞きたいことが見つかったから。
- 3 相手の答えと自分の考えを比べて、考えを深めることができたから。 69.7%
- 4 自分が共感した内容を取り上げて、話題を広げようと考えたから。



17.8%

小森さん
イなるほど。たくさんの方が、乗客の安全を支えてくださっているんですね。私たちは時間を守ることも大切だと思っていましたが、私たちが思っていた以上に安全を第一に考えてくださっていることが分かりました。
自分の考えと比較している

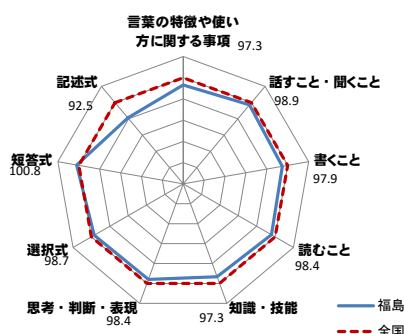
小学校国語×児童質問項目

項目番号	質問内容	相関係数
児童 31	5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか	0.20

相関係数については、p12を参照

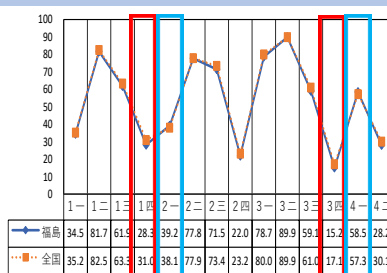
中学校国語の結果概要

領域・観点・問題形式別の状況



※ レーダーチャートでは、全国の平均正答率を100とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

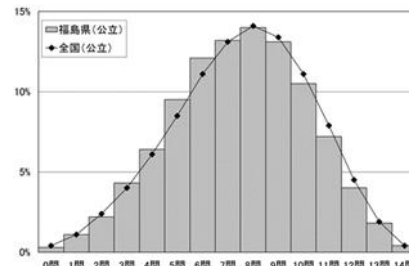
設問ごとの平均正答率



正答率が比較的高い設問（青枠）と低い設問（赤枠）

- 2-「資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができる」
- 4-「読み手の立場に立って、表記を確かめて、文章を整えることができる」
- 1-4「自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことができる」
- 3-4「文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えることができる」

正答数の分布



福島県全体で取り組みたい課題と指導の重点

① 課題の見られた設問

国語3 文学的な文章を読む（「二人の兄弟」）

〔設問4〕「文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えることができる」

② 誤答分析から

文章の展開の効果について、文章の構成や展開を踏まえつつ、根拠（叙述）を明確にして考えることができていない生徒が34.1%でした。このことから、文章の展開の効果を答えることはできていても、本問で着目している展開を踏まえて書くことができなかった生徒が多いと考えられます。また、無回答率も31.4%と高いことから、表現の効果について、根拠を明確にして自分なりに考えることにも課題があると考えられます。

③ 指導の重点

文章の構成や展開について考える際には、文章の構成や展開を把握させるだけでなく、なぜそのような構成や展開になっているのか、そのことがどのような効果につながるのかなどを生徒が考え、表現する学習活動を設定しましょう。そのためには、自分の考えを支える根拠となる部分や文章を明確にしながら、その効果について自分なりに考えさせることが重要となります。また、対話的な学習をとおして、自分の考えを他の読み手の考えと比較しながら考える活動も大切にしましょう。

四
「で開かれた部分には、兄弟が目的を達成できなかった場面のもとに続く話が書かれています。あとに続く話は、「二極本の笑」にはありますが、「二釣の話」にはありません。このような展開になっていることは、「二人の兄弟」という物語においてどのような効果があると考えますか。あなたの考えとその理由を具体的に書きなさい。理由を書く際には、物語の内容を取り上げて書きなさい。
なお、読み返して文章を直したいときは、線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

設問で取り上げられている「表現の技法」については、〔知識及び技能〕に示されている指導事項です。〔思考力、判断力、表現力等〕の学習をとおして適切に指導しましょう。



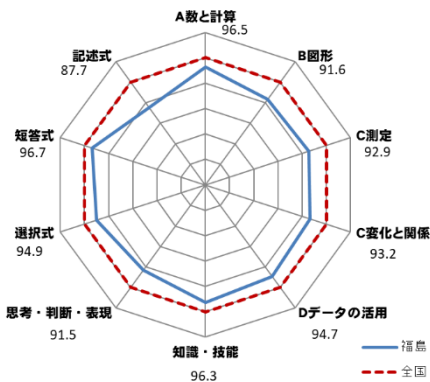
中学校国語×生徒質問項目

項目番号	質問内容	相関係数
生徒 32	1、2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。	0.26

相関係数については、p 12を参照

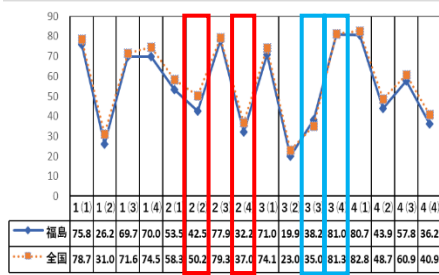
小学校算数の結果概要

領域・観点・問題形式別の状況



※ レーダーチャートでは、全国の平均正答率を100とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

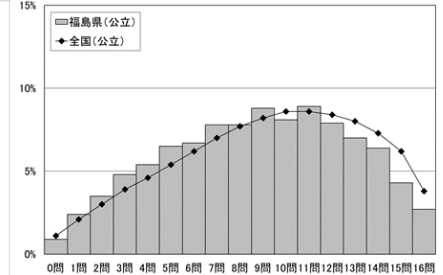
設問ごとの平均正答率



正答率が比較的高い設問（青枠）と低い設問（赤枠）

- 3(3)「数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えることができる」
- 3(4)「異分母の分数の加法の計算をすることができる」
- 2(2)「台形の意味や性質について理解している」
- 2(4)「基本図形に分割することができる図形の面積の求め方を、式や言葉を用いて記述できる」

正答数の分布



福島県全体で取り組みたい課題と指導の重点

① 課題の見られた設問

〔設問2(2)〕「台形の意味や性質について理解している」

② 誤答分析から

全国の前答率が50.2%なのに対して、本県の前答率は42.5%と、全国と比較して7.7ポイントの差がありました。

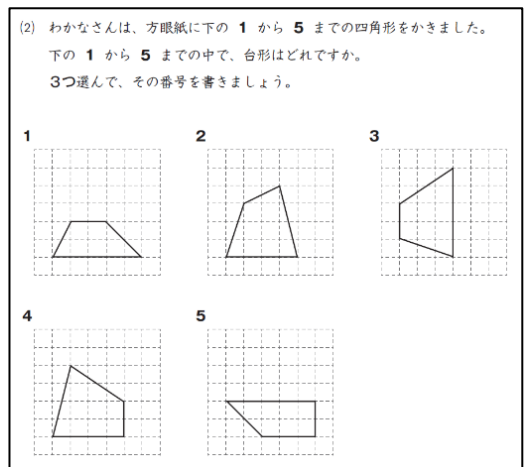
誤答を見ると解答類型2の割合が最も多く32.5%でした。上底が下底より長いものも台形であると判別できなかったことが推測されます。さらに、解答類型6の割合も全国より高いことから、図形の向きが変わった場合に、向かい合った1組の辺が平行であることに着目し、正しく判別することができていないと考えられます。

③ 指導の重点

図形の操作活動を積極的に取り入れ、図形の構成要素間の関係に着目しながら考えさせることで、図形が回転した場合でも垂直や平行などの図形の性質は変わらず、元の図形と同じであると実感できるようにすることが大切です。

さらに、数学的な表現を正しく用いて説明できるようにするためにも、見いだした図形の性質などについて、図と言葉を関連付けながら説明する活動を取り入れるようにしましょう。

図形の性質や計量について考察する力を高め、図形についての豊かな感覚を育成するために、向きを変えた場合の図形の考察や図形の敷き詰めなどの活動を充実させましょう。



2(2)	番号	割合(%)		解答内容
		福島県	全国	
解答類型	1	42.5	50.2	1、3、5と解答しているもの（正答）
	2	32.5	27.1	1、2、3と解答しているもの 1、3、4と解答しているもの 1、3のみを解答しているもの
	3	1.1	1.2	1、2、5と解答しているもの 1、4、5と解答しているもの 1、5のみを解答しているもの
	4	1	1	2、3、5と解答しているもの 3、4、5と解答しているもの 3、5のみを解答しているもの
	5	0	0	1のみを解答しているもの
	6	9.8	8.7	1、2、4と解答しているもの 1、2と解答しているもの 1、4のみを解答しているもの
	99	12.6	11.1	上記以外の解答
	無解答	0.5	0.7	無解答

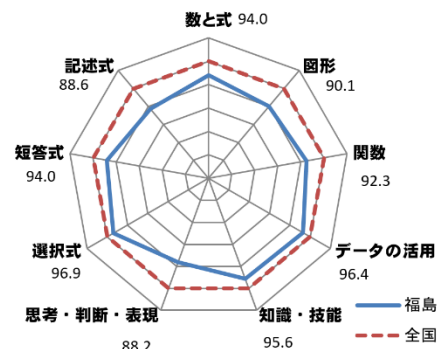
小学校算数×児童質問項目

項目番号	質問内容	相関係数
児童 32	5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。	0.25

相関係数については、p 12を参照

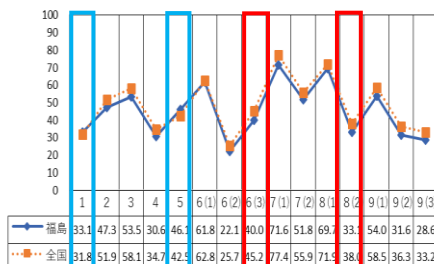
中学校数学の結果概要

領域・観点・問題形式別の状況



※ レーダーチャートでは、全国の平均正答率を100とした場合の本県の平均正答率の割合を示している。

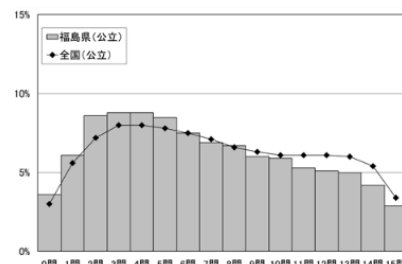
設問ごとの平均正答率



正答率が比較的高い設問（青枠）と低い設問（赤枠）

- 1「素数の意味を理解している」
- 5「相対度数の意味を理解している」
- 6(3)「目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明する」
- 8(2)「事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明する」

正答数の分布



福島県全体で取り組みたい課題と指導の重点

① 課題の見られた設問

〔設問8(2)〕「事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明する」

② 誤答分析から ※ 以下の（ ）内の数字は全国の割合

A駅から60.0kmの地点につくられる新しい駅までのおよその運賃の求め方を説明するには、「用いるもの」と、その「用い方」の両方を記述することが必要です。(a)と(b)、(c)と(d)、(e)と(f)の両方を記述した本県生徒の正答率は33.1% (38.0%)で、詳しくは赤枠のとおりです。

- (a) 直線のグラフ
- (b) x座標が60のときのy座標を読む
- (c) 比例の式又は一次関数の式
- (d) $x = 60$ を代入して、yの値を求める
- (e) 表や数値を用いて求めた割合
- (f) A駅からの走行距離が60.0kmになるときの運賃を算出する

- ◎ (a)と(b)両方を記述 14.6% (15.2%)
- ◎ (c)と(d)両方を記述 1.6% (3.8%)
- ◎ (e)と(f)両方を記述 10.2% (11.3%)
- 不十分だが正答となったもの 6.7% (7.8%)

(a)のみ9.6% (9.9%)、(f)のみ6.1% (5.7%)など、(a)から(f)のうちの1つのみを記述して誤答となった生徒の割合は18.5% (19.2%)であることから、「方法」の説明の仕方が十分身に付いていないことが考えられます。また、この設問は無回答率が40.5% (35.0%)と高いことから、授業においては、生徒に解決の見通しをもたせ、他者と協働的に問題を解決させたり、問題解決の過程を振り返らせたりするとともに、方法や手順を的確に記述させたり伝え合わせたりする活動を位置付けることが大切です。

③ 指導の重点

日常生活や社会の事象を考察する場面では、**事象を理想化したり単純化したりすることによって、事象の中から取り出した二つの数量の関係を既習の関数とみなし、問題を解決する場合があります。**授業においては、**問題解決の方法に焦点を当て、表、式、グラフなどの「用いるもの」と、それらを問題解決するためにどう用いたかといった「用い方」について考えさせ、問題解決の方法を数学的に説明できるように指導することが重要です。**

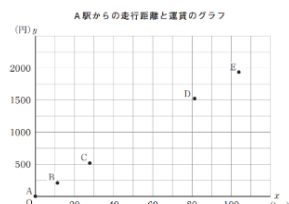
- ⑧ 歩夢さんは、スタジアム
の近くに新しい駅をつくる

計画があることを知り、A駅から新しい駅までの運賃がいくなるのか、A駅からの走行距離と運賃についてインターネットで調べ、次のような表にまとめました。

調べた結果

	A駅	B駅	C駅	D駅	E駅
A駅からの走行距離(km)	0.0	11.4	27.7	81.9	104.6
A駅からの運賃(円)	0	210	510	1520	1930

歩夢さんは、A駅からの走行距離をx km、A駅からの運賃をy 円とし、A駅からの走行距離と運賃の関係についてグラフに表しました。



- (2) 歩夢さんがさらに調べると、新しい駅はA駅から60.0kmの地点につくられることがわかりました。そこで、A駅から新しい駅までの運賃がおよそ何円になるかを予測するために、A駅からの走行距離と運賃のグラフにおいて、原点にある点Aから点Eまでの点が一直線上にあるとして考えることにしました。 **比例とみなして考える**

このとき、A駅から新しい駅までの運賃はおよそ何円になるかを求める方法を説明しなさい。ただし、実際に運賃がおよそ何円になるかを求める必要はありません。

授業の中で説明の仕方について確認するとともに、解決の見通しをもたせ、説明する機会を設定することが重要です。

- 「事柄・事実」の説明
- 「方法・手順」の説明
- 「理由」の説明



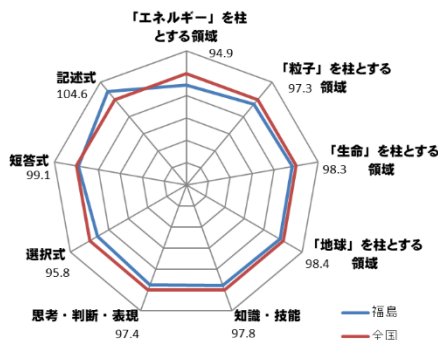
中学校数学×生徒質問項目

項目番号	質問内容	相関係数
生徒 32	1、2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか	0.32

相関係数については、p 12を参照

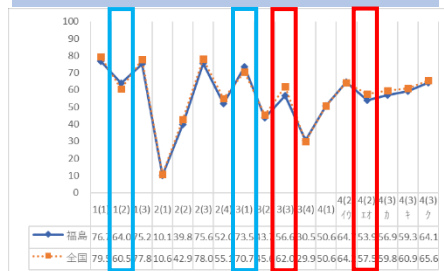
小学校理科の結果概要

領域・観点・問題形式別の状況



※ レーダーチャートでは、全国の平均正答率を100とした場合の本県平均正答率の割合を示している。

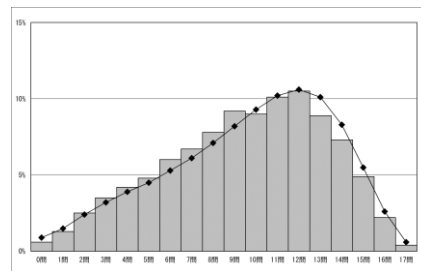
設問ごとの平均正答率



正答率が比較的高い設問（青枠）と低い設問（赤枠）

- 1(2) 赤土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いをまとめたわけについて、結果を用いて書く
- 3(1) ヘチマの花のおしべとめしべについて選び、受粉について書く
- 3(3) ヘチマの種子が発芽する条件を調べる実験において、条件を制御した解決の方法を選ぶ
- 4(2) 水の蒸発について、温度によって水の状態が変化するという知識と関連付け、適切に説明しているものを選ぶ

正答数の分布



福島県全体で取り組みたい課題と指導の重点

① 課題の見られた設問

〔設問 3(3)〕ヘチマの種子が発芽する条件を調べる実験において、条件を制御した解決の方法を選ぶ

② 誤答分析から

全国の正答率が 62.0%であるのに対し、本県の正答率は 56.6%でした。全国と比較し 5.4 ポイントの差があり、今回の調査の中で差が最も大きかったです。

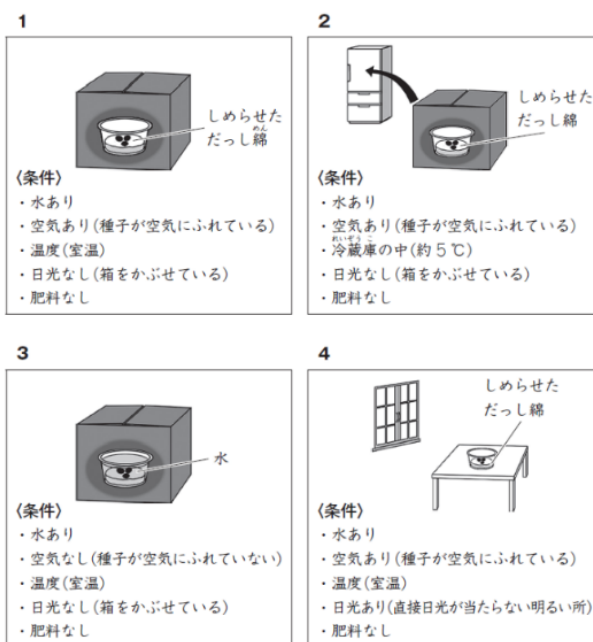
誤答の中で、「2 と 4」を選択しているものが最も多く 17.9%でした。次いで「1 と 4」(7.9%)、「1 と 3」(6.6%)、「2 と 3」(6.5%)となっていました。特に、「2 と 4」及び「2 と 3」は複数の条件が異なっています。考えられる要因の中から、変える条件は1つの要因とし、他の要因は変えない条件として条件を制御しなければなりません。「適した温度（室温）が必要か調べる」ためには、「温度（室温）」のみを変え条件として実験を計画する必要があります。

③ 指導の重点

観察、実験の方法を計画した段階で、**どのような結果になるか見通しをもたせる**ことが大切です。今回の問題では、「片方が発芽したら」「両方発芽したら」「両方とも発芽しなかったら」それぞれどんなことが分かるのかを計画した段階で見通しをもたせることで、実証性、再現性、客観性などといった**条件を検討する手続きを重視しながら問題を科学的に解決すること**のできる児童の育成につながります。



観察や実験の方法を計画する段階で、児童が教科書に載っていない実験方法を発想した場合でも、実証可能であるならば寄り添って検証することも大切です。その際、結果を見通し「どんな結果になったらどんなことが分かるのか」まで児童が考えることができるように指導することが重要です。



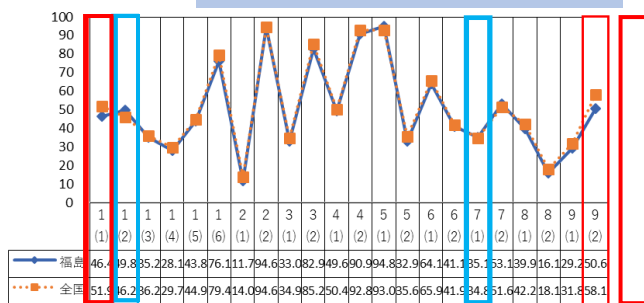
小学校理科×児童質問項目

項目番号	質問内容	設問〔相関係数〕
児童 32	5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか	0.22

相関係数については、p 12を参照

中学校理科の結果概要

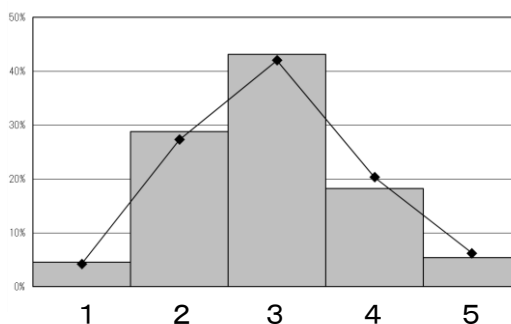
設問ごとの平均正答率



正答率が比較的高い設問（青枠）と低い設問（赤枠）

- 1(2)「理科の実験では、なぜ水道水ではなく精製水を使うのか？」という疑問を解決するための課題を記述する
- 7(1)小腸の柔毛、肺の肺胞、根毛に共通する構造と同じ構造をもつものとして適切な事象を判断し、選択する
- 1(1)電熱線を利用して水を温めるための電気回路について、直列と並列とで回路全体の抵抗が大きい装置や速く水が温まる装置を選択する
- 9(2)クリーンルームのほかに気圧を利用している身近な事象を選択する

IRT バンドの分布



全受験者の IRT スコアを 1～5 の 5 段階に区切ったものです。3 を基準のバンドとし、5 が最も高いバンドとなります。

福島県全体で取り組みたい課題と指導の重点

① 課題の見られた設問

〔設問 1(6)〕「水をテーマに科学的に探究する水道水と精製水に関する 2 人の表を見て、探究の過程におけるあなたの振り返りを記述する」

② 誤答分析から

「水道水や精製水に対して振り返る表現とになっている」ことが正答の条件であり、条件を満たした生徒の割合は 76.1%でしたが、全国の前年率 79.4%を下回りました。無回答の反応率 11.1%は全国の前年率 9.7%を上回っており、条件を満たさない生徒を含めると、2 割の生徒が、探究の過程をとおして何を振り返ればよいのかがわからないものと考えられます。

正答した解答の中では、自己の変容に関した振り返りを解答した反応率が最も高かったことから、生徒にとって振り返りがしやすい視点であると考えられます。

③ 指導の重点

過去の調査における記述式の無解答の反応率と比べると、本設問の無解答の反応率が低いことから、終末部での振り返りが継続して実践されている成果と考えられます。振り返りをとおして、すべての生徒が学びを深め、次の学びへ向かうことができるように、今後も引き続き、**振り返りを設定するとともに、さらに目的的な活動**としていくことが大切です。



自己の変容に気付く振り返りは、生徒にとって非常に大切な学習過程の一つです。そのため、振り返りの場面を適切に設定するとともに、書く内容を迷っている生徒に対しては、「はじめの考えからの変容」など、具体的な視点の文例を示した上で、自らの言葉で記述させるように支援していきましょう。

中学校理科×生徒質問項目

項目番号	質問内容	相関係数
生徒 32	1、2 年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか	0.24

相関係数については、p 12 を参照

4 学力調査と質問調査の分析 ～多面的な分析による福島県の強みとこれからの課題

質問調査項目で見られる福島県の特徴

質問項目	質問内容	肯定的な回答をした児童生徒の割合(%)	全国との差
[児童生徒36]	学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか	全国 (小 : 79.4) (中 : 73.4)	小 : +3.8 中 : +3.1
		県 (小 : 83.2) (中 : 76.5)	
[児童生徒37]	授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると感じますか	全国 (小 : 82.5) (中 : 74.8)	小 : +3.5 中 : +4.4
		県 (小 : 86.0) (中 : 79.2)	
[児童生徒38]	先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると感じますか	全国 (小 : 87.4) (中 : 83.8)	小 : +2.6 中 : +2.9
		県 (小 : 90.0) (中 : 86.7)	
[児童生徒28]	PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか (選択肢1及び2「ほぼ毎日」の合計)	全国 (小 : 46.7) (中 : 53.2)	小 : -15.2 中 : -4.3
		県 (小 : 31.5) (中 : 48.9)	
[学校質問19]	個々の教員が自らの専門性を高めるため、校外の各教科等の教育に関する研究会等に定期的・継続的に参加していますか (オンラインでの参加を含む)	全国 (小 : 89.6) (中 : 87.5)	小 : +4.6 中 : +5.4
		県 (小 : 94.2) (中 : 92.9)	
[学校質問81]	調査対象学年の児童(生徒)に対して、前年度までに、家庭学習について、児童(生徒)が自分で学ぶ内容や学び方を決めるなど、工夫して取り組めるような活動を行いましたか	全国 (小 : 90.6) (中 : 85.9)	小 : +4.1 中 : +8.9
		県 (小 : 94.7) (中 : 94.8)	
[学校質問26]	調査対象学年の児童(生徒)は、授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていますと感じますか	全国 (小 : 80.4) (中 : 82.8)	小 : -4.4 中 : -1.4
		県 (小 : 76.0) (中 : 81.4)	
[学校質問27]	調査対象学年の児童(生徒)は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを相手にしっかりと伝えることができていますと感じますか	全国 (小 : 89.2) (中 : 90.8)	小 : -4.5 中 : -4.1
		県 (小 : 84.7) (中 : 86.7)	
[学校質問32]	調査対象学年の児童(生徒)に対して、前年度までに、授業において、児童(生徒)自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れましたか	全国 (小 : 89.9) (中 : 86.1)	小 : -2.3 中 : -6.1
		県 (小 : 87.6) (中 : 80.0)	

学校質問の領域と項目の対応表

質問調査の領域は学校全体の教育活動や授業の方向性を共有し、課題を多角的に捉えるための視点として、質問項目はそれぞれの領域における具体的な視点や手がかりとすることもできます。

領域番号	領域名	学校質問番号	領域番号	領域名	学校質問番号
1	学校規模等	(1)～(6)	9	理科の指導方法	(49)～(54)
2	生徒指導等	(7)～(10)	10	ICTを活用した学習状況	(55)～(68)
3	学校運営に関する状況/教職員の資質向上に関する状況	(11)～(24)	11	特別な配慮が必要な児童への指導	(69)～(71)
4	主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況	(25)～(35)	12	小学校教育と中学校教育の連携	(72)
5	総合的な学習の時間、学級活動、特別の教科 道徳の指導方法	(36)～(39)	13	家庭や地域との連携等	(73)～(79)
6	学習評価	(40)	14	家庭学習	(80)～(82)
7	国語科の指導方法	(41)～(44)	15	調査結果の活用	(83)～(84)
8	算数科の指導方法	(45)～(48)			

相関係数を手がかりとした授業改善の視点

質問調査の分析から、児童生徒の学力と「主体的・対話的で深い学び」の質問領域に相関が見られました。「主体的・対話的で深い学び」に関する質問項目を授業改善の視点の一つとすることもできます。

相関とは？

相関とは、2つのものが「一緒に動く傾向があるかどうか」を示す関係のことです。この関係の強さは、「相関係数」という数値で表され、-1から1までの値を取ります。一般的に、相関係数の数値が0から離れるほど関係が強く、絶対値が0.2くらいから「相関があるかもしれない」と考えられるようになります。本調査の分析においても、相関をきっかけとして考えられる要因を探りながら授業改善を行っていくことが期待されます。なお、相関については因果関係を示すものではないことに注意が必要です。

視点1 課題の解決に向けて自分から取り組んでいるか

() 内は相関係数

[児童生徒質問 3 2] × [各教科の平均正答率]	[課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んだ] × [各教科の学力]	小	国語 (0.22) 算数 (0.25) 理科 (0.22)
		中	国語 (0.26) 数学 (0.32) 理科 (0.24)

視点2 授業で工夫して発表しているか

() 内は相関係数

[児童生徒質問 3 1] × [各教科の平均正答率]	[自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表した] × [各教科の学力]	小	国語 (0.20) 算数 (0.22) 理科 (0.20)
		中	国語 (0.21) 数学 (0.24) 理科 (0.17)

「主体的・対話的で深い学び」×「児童生徒のウェルビーイング」

「主体的・対話的で深い学び」は、子どもたちの学力だけでなく、ウェルビーイング（心身の健康や幸福）とも相関が見られます。子どもたちの学校生活の充実感や、自分自身への肯定的な気持ち、他者との豊かな関係性などへの影響の可能性を示唆しています。

() 内は相関係数

[児童生徒質問 3 2] × [児童生徒質問 5]	[課題の解決に向けて自分から取り組んだ] × [自分にはよいところがあると思う]	全国	(小 : 0.31) (中 : 0.29)
		県	(小 : 0.30) (中 : 0.28)
[児童生徒質問 3 5] × [児童生徒質問 1 3]	[話合いで考えを深めたり新たな考えに気付いたりした] × [自分と違う意見について考えるのは楽しい]	全国	(小 : 0.40) (中 : 0.37)
		県	(小 : 0.41) (中 : 0.34)
[児童生徒質問 3 4] × [児童生徒質問 6]	[個別最適な学び] × [先生がよいところを認めてくれている]	全国	(小 : 0.30) (中 : 0.32)
		県	(小 : 0.31) (中 : 0.30)
[児童生徒質問 3 9] × [児童生徒質問 1 2]	[協働的な学び] × [学校に行くのは楽しい]	全国	(小 : 0.34) (中 : 0.36)
		県	(小 : 0.34) (中 : 0.34)

5 授業改善のための情報リンク

全国学力・学習状況調査についての基本情報

① 国立教育政策研究所 ホームページ

全国学力・学習状況調査の報告書や詳細な分析結果が確認できます。過去の調査結果も掲載されており、経年比較や詳細な分析に役立ちます。

<https://www.nier.go.jp/kaiatsu/zenkokugakuryoku.html>



【令和7年度調査】

- ▶ 結果公表①「正答率・IRT バンド分布などの全国平均(令和7年7月14日公表)」
- ▶ 結果公表②「報告書・調査結果資料(令和7年7月31日公表)」
「授業アイディア例一覧(令和7年7月31日公表)」
- ▶ 結果公表③ 8月以降(秋頃)

【令和6年度経年変化分析調査・保護者に対する調査】

- ▶ 「令和6年度経年変化分析調査・保護者に対する調査結果資料について(令和7年7月31日公表)」

【これまでの調査】

過年度の調査問題・正答例・解説資料や、報告書・調査結果資料についても確認できます。

② 文部科学省 ホームページ

全国学力・学習状況調査の目的、概要、Q&Aなどが掲載されています。
児童生徒に提供する個人票の見方についても確認することができます。



https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/zenkoku/1344101.htm

CBTシステムの活用

③ 文部科学省 CBT システム (MEXCBT)

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/mext_00001.html



全国学力・学習状況調査の CBT 化により、児童生徒はタブレットや PC を使って解答することになります。MEXCBT を日常的に活用することで、キーボード入力やマウス操作、画面上での問題文の読み方など、デジタルデバイスでのテスト形式に慣れることができます。

全国学力・学習状況調査の設問形式や出題傾向に合わせた問題に取り組むことができたり、結果で浮き彫りになった課題に対し MEXCBT 内の豊富なコンテンツから該当する単元の問題を選んで個別に配信したりなど、効率的な復習を促すことができます。

